

第3問 次の文章を読んで、後の問い(問1〜6)に答えよ。(配点 50)

(注1) この国の都なすあたりのかたはらなる、中田といふ所に住む人ありけり。代々鷹飼ふことをわざとしつつ、身はいやしなから、志ありて、あがれる世の手ぶりを慕ひ、何くれと学ばまく欲りするなかに、手書くことをなん、たてては好めりし。されど、摺巻(注2)に伝はれる書のほか、師とする人もなき山ふところに、あやなく思ひをくらさんよりは、山城(注3)の大都に上りて、(ア)高き手ぶりをも見あきらめばやと、ゆくりなく思ひおこして、岩根黒土踏みさくみて、文化四年といふ年の弥生(注4)ばかり、まるのぼれりしに、世のわき知らぬ山がつのおしはかりとはたがひて、高き宮のうちには、かくと言ひよらんたづきもなく、至れるいやしき身には、御伝へも下らずと聞きて、はやりかなりし心もしなへうらぶれつつ、行く先をようもたどらでおほけなく思ひ立ちぬることを思へば、井に住む鮒(注5)の大海に出でぬるに似たり。かくのみにて空しく帰らんことを思へば、鳴る神(注5)につく獸の、雲におくれたるに似たり。(イ)いとほしたなりと思ひ屈しつつ、名所など見めぐりて籠りをりき。

さるは、石井了陸といふ人のもとにぞ宿れりし。この家に、おぼえずおぼえず持明院(注6)の宮の宮人来あひて、酒飲み、物語などするに、「この田舎人は、かかる志の侍りて、はるばるにまるのぼり来しを、その志遂げずして帰らんことを、いたく思ひ嘆き侍るなり」と、あるじの語り出でたるを、かの宮人つぶさに聞きて、「いと不便なりつることかな。おしなべては叶(注7)ひがたきことなれど、志の深さには、高きいやしきけぢめもなきものぞ。我よくこととり申さんと、うけがはれたるに、うれしきことたとへんものなし。この人のはからひによりて、おほけなき御前わたりも御許しありて、入木(注7)といふ書法を御手づから伝へたまはせりなどしつつ、(ウ)本意(注8)にもこえて事なりぬれば、身に余りてうれしと思ひて、道の奥に下るきざみ、先の宮人、この人の二なき志をめで給ひて、琴を送られしが、絃一筋ある琴なりき。これに歌そへよとあるに、

A 一筋に思ふ心は玉琴の緒によそへつつひきや伝へむ
家なども、もとよりは広く清らに作りなして、めぐりに松子植ゑわたし、移り行く月日にそへてめではやししを、こたみ公よ

り蝦夷が千島に防守を置かるることありて、この国よりもまづ出ださるるによりて、その数に指されて、出で立たむとす。「行き帰るまで、さる広き家に女子のみ置きては守りがたし」とて、家をば売り、女子は人のもとに預けて行く。その心にかはりて、

B 家出でて行くかひありと思ひしに家なくなりて行けばかひなし

C 二筋に落つる涙も一筋の玉の小琴にかけにけるかも

その琴は、むかし行平の中納言、流されて須磨におはせし時、庇の杉を風の吹きおとしたるが、その形面白かりければ、くしげの箱なる元結を一筋ひきかけて、調べ給へるよりはじまりて、今も伝はれるなりとぞ。

(「真葛がはら」による)

(注) 1 この国——陸奥。今の東北地方。

2 摺巻——印刷本。

3 山城の大都——京都。

4 文化四年——一八〇七年。

5 鳴る神につく猷——想像上の怪物。落雷とともに地上に落ちてくると伝えられていた。

6 宮人——貴人に仕える人。

7 入木といふ書法——ここでは、中世末から宮廷貴族の書風として継承されていた持明院流の書道をいう。

8 行平の中納言——在原行平。平安時代の歌人。

9 くしげの箱——髪を結うための道具などを入れておく箱。

10 元結——髪をたばねて結うための細い糸。

問2 波線部 a ～ d の文法的説明の組合せとして正しいものを、次の ① ～ ⑤ のうちから一つ選べ。解答番号は

23

- | | | | | | | | | |
|---|---|--------|---|--------|---|--------|---|---------|
| ① | a | 受身の助動詞 | b | 断定の助動詞 | c | 完了の助動詞 | d | 動詞の活用語尾 |
| ② | a | 尊敬の助動詞 | b | 伝聞の助動詞 | c | 格助詞 | d | 動詞の活用語尾 |
| ③ | a | 受身の助動詞 | b | 伝聞の助動詞 | c | 断定の助動詞 | d | 完了の助動詞 |
| ④ | a | 尊敬の助動詞 | b | 断定の助動詞 | c | 格助詞 | d | 動詞の活用語尾 |
| ⑤ | a | 尊敬の助動詞 | b | 断定の助動詞 | c | 完了の助動詞 | d | 完了の助動詞 |

後半はカラーなしです

a

(位の高い
登場人物)
かの宮人「と」と

うへげが	うへげが	うふげが	うふげが	うひげが	うはげが				
命令	已然	連体	終止	連用	未然				
	れよ	るれ	るる	るる	れれ	れ			
	命令	已然	連体	終止	連用	未然			
			たれ	たれ	たる	たり	たり	たら	
			命令	已然	連体	終止	連用	未然	
					に				

高位の人物の動作について述べているから、尊敬。

※「れ」が受身か、尊敬かを問う。

b

体名詞 琴

なれ	なれ	なる	なり	なり	なら				
命令	已然	連体	終止	連用	未然				
	○	しか	し	き	○	(せ			
	命令	已然	連体	終止	連用	未然			

体言に接続しているから、断定。

※「なり」が断定か、伝聞か、を問う。

c

小琴に

かけよ	かくれ	かくる	かく	かけ	かけ		
命令	已然	連体	終止	連用	未然		
ね	ねれ	ぬる	ぬ	に	な		
命令	已然	連体	終止	連用	未然		
		○	けれ	ける	けり	○	けら
		命令	已然	連体	終止	連用	未然
				かも			

完了

連用形に接続

動詞の連体形に接続

c

※「に」が完了か、格助詞か、断定か、を問う

連用形に接続しているから、完了。

d

調べよ	調べれ	調ぶる	調ぶ	調べ	調べ			
命令	已然	連体	終止	連用	未然			
			給へ	給へ	給ふ	給ふ	給ひ	給は
			命令	已然	連体	終止	連用	未然
	れ	れ	る	り	り	ら		
	命令	已然	連体	終止	連用	未然		
			より					

完了

四段の已然形に接続

動詞の連体形に接続

d

※「る」が已然形接続の完了か、動詞活用語尾なら、下二段「給ふる」になる。よって、完了

語尾かを問う